ヴァイツの自然科学的心理学

本　間　栄　男

キーワード：テオドア・ヴァイツ（Theodor Waitz, 1821−1864），カール・ルートヴィヒ（Carl Ludwig, 1816−1895），心理学史，感情（Gefühl）

第１節　ヴァイツの生涯
　第１節第１項　ヴァイツの生涯
　第１節第２項　ヴァイツ研究史
第２節　ヴァイツの科学的心理学
　第２節第１項　『心理学の基礎』における科学的心理学
　第２節第２項　ルートヴィヒの科学的方法
　第２節第３項　『心理学教本』における自然科学的心理学
　第２節第４項　『心理学教本』における心の本質
第３節　ヴァイツの感情論
　第３節第１項　心情
　第３節第２項　感情とその性質　(1)形式的感情
　第３節第３項　感情とその性質　(2)表象内容と関連する感情
　第３節第４項　情動と情念
第４節　まとめ

これまで，19世紀ドイツの科学的心理学における感情論の変遷をたどる論文を書いてきた（本間 2017；本間 2019；本間 2020；本間 2021）。本論文もその一環であるが，題名が一貫していない。理由は，今回取り上げるこの人物の感情論に関して先行研究（Romand 2015）が存在するからである。そのため，本論文では感情論の他にヴァイツの方法論の紹介も行うことにする。

第1節　ヴァイツの生涯

第1節第1項　ヴァイツの生涯

ヴァイツ自身による自伝がある。1862年までに書かれた実質2ページの文章で，その文章の直後に編者オトー・ゲルランド（Otto Gerland, 1835−1922）による5行ほどの補遺と著作リストが付く（自伝）[1]。ヴァイツの生涯についての最も古い二次文献は，マールブルク大学の同僚ヘンケ（Ernst Ludwig Theodor Henke, 1804−1872）[2]による葬送演説であろう（Henke 1864）。おそらくその直後，かつて同僚だったツェラー（Eduard Gottlob Zeller, 1814−1908）[3]による小伝が著され，同人の『講演と論文集』第2巻に収録された（Zeller 1877）。Deutsche Biographieにはゲオルク・ゲルラント（Georg Gerland, 1833−1919）[4]による小伝があり，これはヴァイツの『一般

1）ゲルラントの著作は1863年出版と表題にある（序文は1863年9月の日付）が，1864年5月21日のヴァイツの死の話題まで含まれているので，実質1864年5月以降に出版されたのだろう。またヴァイツが正教授になった（1862年11月）ことを本人が書いていない（ゲルラントの補遺にある）ので，自伝はそれ以前に書かれたと思われる。

2）神学者・歴史家。1839年以来マールブルク大学神学教授だった。https://www.deutsche-biographie.de/sfz29700.html。2022年9月20日確認（以下同様）。

3）哲学者・神学者。1849−1862年の間マールブルク大学哲学教授だった。https://www.lagis-hessen.de/pnd/118636383。

4）GeorgとOttoは兄弟（オトーが弟）。兄カール・コルネリウス・ゲオルク（Karl Cornlius Georg Gerland）は地理学者・民族学者。https://www.deutsche-biographie.de/sfz69899.html。弟ヨーハン・ルートヴィヒ・オトー（Johann Ludwig Otto Gerland）は著作家。https://www.deutsche-biographie.de/sfz20661.html。彼らに全くの別人のOtto Gebhardt，Otto Willmannが絡むので不必要に混乱する。

教育学』第4版に再録される（Gerland, Georg 1898）。ゲプハルト（Otto Gebhardt）[5]による学位論文の伝記部分は上記の諸文献に依拠して書かれている（Gebhardt 1906）。さらにインターネット上の三次文献としてHessische Biografieなどがある[6]。本項では，以上の文献に基づいてまとめる。

ヴァイツ家は今のハンガリーのヴァーツ（Vác，そのドイツ語名称がヴァイツェン（Waitzen）である）出身であり，名字はこの都市に由来する。一族は16世紀にドイツに移住したという。おそらく，オスマン帝国の支配（1541年に占領された）を嫌ってのことだろう。歴史家のレオポルト・フォン・ランケ（Leopold von Ranke, 1795–1886）の弟子で歴史家・政治家のゲオルク・ヴァイツ（Georg Waitz, 1813–1886）もこの一族に属する。我々のヴァイツの家系は17世紀からゴータ（Gotha）に住み[7]，当地で説教師・学校教師を代々輩出していた。我々のヴァイツの父ハインリヒ（Johann Heinrich Wilhelm Waitz, 1785–1860）も聖職者で説教者であり，学校教師であった。ツェラーは『論理学教本』（Lehrebuch der Logik）という小冊子を1840年に出版したとしているが，私は確認できなかった。母はシャルロッテ・ブドイス（Charlotte Friederike Wilhelmine Buddeus, 1790–1862），ゴータの医師の娘だった。この夫婦の子供で成人できたのは一男一女だけだったようだ（娘の情報は不明）[8]。この息子が我々のテオドア・ヴァイツ（Franz Theodor Waitz）である。以下，ヴァイツと言えばこの人物を指す。

5）ドイツ東部の町オーシャツ（Oschatz）生まれ。1906年にライプツィヒ大学でフォルケルトとヴントの下で哲学博士号を得た。1910年には『テオドア・ヴァイツの一般教育学と教育学小論集』（*Theodors Waitz' Allgemeine Pädagogik und kleinere pädagogische Schriften / mit e. Einf. über das Verhältnis d. Waitzschen Pädagogik zu s. Ethik, Psychologie, Anthropologie u. Persönlichkeit u. e. Bildnis d. Verf.* hrsg. von Otto Gebhardt. Langensalza: Beyer）を編纂している。その他にも幾つか著作が見られるが，伝記は不明。

6）Hessische Biografieは，https://www.lagis-hessen.de/de/subjects/index/sn/bio。

7）**ゴーダ**チーズで有名なのはオランダの都市Gouda（英語読みでガウダ，オランダ語読みでハウダ）。

8）この時代のことなので，他にも若年で死亡した子供がいたかもしれないが，文献の記録にはない。

ヴァイツ自身は自分の名前を「テオドア・ヴァイツ」とのみ記しているので，本論文を含めて多くの文献はそれに習っている。ヴァイツは1821年3月17日にゴータで生まれた。科学史関連では，同じ年に「エンゲル係数」で知られるエルンスト・エンゲル（Ernst Engel, 1821−1896），ヘルムホルツ（Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821−1894），ヴィルヒョー（Rudolf Ludwig Karl Virchow, 1821−1902）が生まれている[9]。

少年時代は両親からたっぷり愛情を注がれ，ゴータ公爵家の人びととも昵懇であったという。父親が校長をしていた初等学校をでた後，ゴータのギムナジウムに学び，古典語と数学に関心を持った。17歳でギムナジウムを卒業すると，イェーナ大学で古典学者ゲートリンク（Karl Wilhelm Göttling, 1793−1869）に，ライプツィヒ大学ではドロービシ（Moritz Wilhelm Drobisch, 1802−1896）に学んだ[10]。この時期のエピソードとしては，1840年にヴァイツの両親が銀婚式のお祝いをする場で，自らの哲学博士号をプレゼントした，というものがある。学位論文の詳細はどの伝記も伝えていない（どこの大学で得たのかも不明）。大学を卒業後，1年実家に留まった。

その後，大学教授資格を得るための研究として，アリストテレスのオルガノンをテーマとした。イタリアとフランスの図書館を巡り，当時未出版だったオルガノンのギリシャ・ラテン註釈を収集した。大学教授資格論文は『命題論』を扱ったもので，1844年にマールブルク大学に提出された[11]。研究の全体は全2巻の注釈書（1844−1846）として出版された[12]。マールブルク大学で私講師としていつから教え始めたかは不明だが，1848年8月26日に哲

9）著名人を拾ったら，皆長生きしていた。それだけにヴァイツの短命は残念。

10）この時期ドロービシは晩年のヘルバルトと微妙な関係にあり，ヘルバルト自身の心理学というよりドロービシ自らの数学的心理学を教えた可能性が大きい（本間 2021）。

11）*De Aristotelis libri ΠΕΡΙ ΕΡΜΝΕΙΑΣ capite decimo*. Marburgi: Typis Elwerti Academicis, 1844。

12）*Aristotelis Organon graece. Pars prior: Categoriae, Hermenevtica, Analytica priora*. Lipsiae: Svmtibvs Hahnii, 1844；*Aristotelis Organon graece. Pars posterior: Analytica posteriora, Topica*. Lipsiae: Svmtibvs Hahnii, 1846。

学の員外教授に任命された。

古典文献学的研究の次にヴァイツが取り組んだのは，おそらくドロービシの影響を受けたヘルバルト主義心理学だった（ドロービシの『自然科学的方法による経験心理学』（*Empirische Psychologie nach naturwissenschaftlicher Methode*）は1842年出版）。その結果，1846年に『心理学の基礎，ならびに動物の心的生活，特に本能現象への応用』（GP），1849年には『自然科学としての心理学教本』（LP）が相次いで出版された。これらの著作には同時期にマールブルク大学にいて親交を結んだルートヴィヒ（Carl Friedrich Wilhelm Ludwig, 1816−1895）の影響も重大である（この人物については本論文第2節第2項）。自伝では名前を挙げて感謝している唯一の人物がこのルートヴィヒである。この間に，1847年にはヘッセン大公の将軍であったベク（Johann Ludwig Friedrich Beck, 1779−1841）の娘ルイーゼ（Luise Beck, 1818−1877）と結婚した。この結婚では少なくとも男女2人の子供が生まれ，息子はのちのテュービンゲン大学の物理学者・天文学者カール・ヴァイツ（Karl Moritz WaitzあるいはCarl Waitz, 1853−1911），娘アナ（Anna, 1854−1884）は，指揮者で音楽学者レオンハルト・ヴォルフ（Leonhard Wolff, 1848−1934）と1877年に結婚した[13]。

1848年はドイツの騒乱の年だがヴァイツはそれには関わらなかった。ヴァイツは心理学の研究にめどが付くと，それを基礎にした実践哲学の構築を目指し，まず教育学にとりかかった。1850年前後に複数の教育学論文を発表し，1852年には『一般教育学』（初版）を刊行した。しかしヴァイツの教育改革への提言が当時の教育改革論争と微妙に共鳴したために，危険分子とみなされたヴァイツは栄転の道を閉ざされることとなった。1862年11月16日にマールブルク大学の正教授となったが，他の大学への転出は叶わなかった。大学での講義は多岐にわたり，心理学，倫理学，教育学，哲学史，

13）レオンハルト・ヴォルフの詳しい伝記は不明。ヴォルフはのちにボン大学教授で音楽監督となる。

論理学，心身論，人類学にも及んだ[14]。特に，教育学の次の目標としてヴァイツは人類学の研究に取り組んだ。そして，6 年の歳月を要してまとめたシリーズの第 1 巻『自然人の人類学』（*Anthropologie der Naturvölker*, 1859）を出版した[15]。これは，翌 1860 年第 2 巻『黒人とその近縁，民族誌的文化史的に表された』（*Die Negervölker und ihre Verwandten*），第 3 巻と第 4 巻『アメリカ人』（*Die Amerikaner*，1862−1864，これは中南米の原住民を扱う），ヴァイツ死後に上述のゲオルク・ゲルラント（兄弟の兄の方）がヴァイツの遺稿をまとめた第5巻と第6巻『南洋人』（*Die Völker der Südsee*, 1870−1872，太平洋の島々の人びとを扱う）で完結を見た。このシリーズとは別に『北アメリカのインディアン』（*Die Indianer Nordamerica's*, 1865）も著者の死後に出版された。第 1 巻は死後に上述のゲルラントによって増補され『人類の一性と人間の自然状態について』（*Über die Einheit des Menschengeschlechtes und den Naturzustand des Menschen*, 1877）と改題して出版された。

ヴァイツは人類学の後に宗教哲学を研究しようとしていた。それとの関係は不明だが，ヴァイツは 1863 年にミュンヘンに研究旅行に出て，その年の秋に病気でマールブルクに戻ってきた。翌年の復活祭休みに再びミュンヘンに出かけたものの，今度も体調を崩して戻ってきた。その後チフスを発症し，1864 年 5 月 21 日に 43 歳で亡くなった。

恵まれない大学での研究者生活であったが，慰めを家族と趣味に求めた（と本人が言っている）。特に音楽の能力に秀でていて，音楽文献に精通していただけでなく，自ら良いクラヴィーア奏者であり，作曲も行った。ヘンケによれば，晩年（本人はそう思っていなかっただろうが）のヴァイツはスペ

14）以下で，今日の基準では適切でない表現が出てくるが，歴史を扱う本論文の性格上，引用部分においては当時の表現をそのまま用いる。ちなみにヴァイツは以下の著書の情報を当時ふんだんに利用できた旅行記などの文献から得ている。ヴァイツの人類学については：Jahoda 2014；Smith 1999。

15）「自然人」（Naturvölker）とは，文明人に対する〈文明化されていない人〉というような意味。

イン語とオランダ語を学ぼうとしていたという（Henke 1864: 4）。

上述のゲプハルトは論文を執筆する際に，ヴァイツの手稿を参考にしていた。それは我々のヴァイツの息子カール・モーリツが持っていたものである。今日それがどこにあるのかは不明である。

第1節第2項　ヴァイツ研究史

ヴァイツの最初の著作であるアリストテレス論理学の研究は，その後も便利な資料集として重宝された。日本ではリプリント版も含めるとヴァイツ著作中で最も所蔵が多い[16]。

ヴァイツ全般についての研究としては，オトー・ヴィルマン（Gustav Philipp Otto Willmann, 1839–1920）[17]による「ヴァイツの実践哲学について」がまとまっている（Willmann 1898）。この論文はヴァイツの『一般教育学』第4版（AP4）に添付されている（初版は1852年刊）。この第4版はヴァイツのいくつかの教育学論文とゲオルク・ゲルラントによる伝記なども含んでいて，ヴィルマン自身によって編纂されている。そのあと，オトー・ゲプハルトによる学位論文で教育学を主題としてヴァイツの著作が全般的に検討された（Gebhardt 1906）。ベーネケに関しても19世紀と20世紀の世紀転換期に教育学的観点からの見直しがあったように（本間 2020），ヴァイツもこの時代に再発見されたのかもしれない（批判的ではあるが，Muszynski 1900）。ただ，その後に何かが続いたようには見えない[18]。戦前にヘルバルトを論じた稲富栄次郎（1897–1975）によると，世紀転換期のヘルバルト派

16）CiNiiでは原書で10館（コピー本が1館），1965年のリプリント版で25館の所蔵が確認できる。

17）ドイツの哲学者・教育学者。https://www.deutsche-biographie.de/sfz31227.html。またオトーだ。

18）たとえば，20世紀にドイツ人研究者アルベルト・レーブレが書いた通史『教育学の歴史』（初版は1951年；広岡義之・津田徹 訳『教育学の歴史』，東京：青土社　2015（Albert Rehble, *Geschichte der Pädagogik*（20. Auflage, 2002）の訳）には名前が挙がっていない。

教育学者ヴィルヘルム・ライン（Wilhelm Rein, 1847−1929）はヴァイツをヘルバルト学派中の「舊派（die ältere Richtung）」に分類している，という（稲富 1936: 166−168）。ちなみに，日本語でヴァイツを単独で扱った論文はまだ存在しないようである。

ヴァイツの人類学研究は一定の影響力を持った（Jahoda 2014）。野島忠太郎[19]は「生理学的色彩を加え，形而上学的見解を離脱」したとヴァイツ心理学を評価し，さらにラツァルス（Moritz Lazarus, 1824−1903）とシタインタール（Heymann Steinthal, 1823−1899）に先行する民族心理学への道を開いた人物とみなしている（野島 1937: 113）。ヴァイツの教育学・人類学の研究を同時代の政治的文脈で検討した研究もある（Smith 1991: 46−51）。

ヴァイツの心理学上の位置については，通常はヘルバルト派の一員として名前が挙げられるだけだった（Stout 1889；Gundlach 2012: 267）。だが，例によって城戸幡太郎は或る程度詳しく論じている（城戸 1968: 446−448）。21 世紀に入ってダヴィド・ロマン（David Romand）[20]がヴァイツの感情論についての論文を発表している（Romand 2015）。本論文はこの論文とはなるべく重ならない部分を扱っている。

第 2 節　ヴァイツの科学的心理学

ヴァイツの心理学関係の著作は 2 つある。『心理学の基礎』（1846 年，GP）と『自然科学としての心理学教本』（1849 年，LP）である。その他に，書評（SP）などがあるが，本論文では 2 つの著作で主張されるヴァイツの「科学的心理学」について検討する。ヴァイツの両著作は，それぞれ通し番

19）野島忠太郎は生没年不明（1950 年には存命中）。東京出身で，岐阜県で教育実践を行っていた（大泉溥（ひろし）編『日本心理学者事典』（東京：クレス出版，2003），836）。

20）個人情報は不明。現在はフランスのAix-Marseille UniversityにあるCentre Gilles Gaston Grangerに属しているらしい。https://univ-amu.academia.edu/DavidRomand。主に 19 世紀後半の心理学史，とくに感情の心理学史についての論文を発表している。

号の節で区切られているが，各節がかなり長い（事実上〈章〉くらいある）ので，引用の際に節番号は加えない。また，両著作とも本文の前に序があり，本文のアラビア数字に対して，序はローマ数字でページ番号が示されている。

第 2 節第 1 項　『心理学の基礎』における科学的心理学

ヴァイツの心理学についての方針は『心理学の基礎』（1846 年）の序に見出せる。ドイツ観念論を想定した思弁に対して，ヴァイツはカントと共に批判的考察から出発することを言明する。「私がこの著作で求めたことは，短く言うと，心理学を疑いのない生理学的事実に基礎付けることである」（GP: IV）。こうすることで，心理学は哲学（特に思弁的哲学）から自立して自然科学の領域に入るだろう。だからといって単純な唯物論的生理学を求めるのではない。理想とする生理学者はヨハネス・ミュラー（Johannes Peter Müller, 1801−1858）である（GP: V）。ほぼ同じ言明を我々はドロービシに見ている（本間　2021: 53−54）。ドロービシの影響というよりは，科学的に妥当な線で生理学を考えるならば，同じやり方にならざるをえなかったのだろう。ミュラーの『講義のためのヒトの生理学ハンドブック』全 2 巻（*Handbuch der Physiologie des Menschen für Vorlesungen*. Coblenz: J. Hölscher, 1834−1840）は同時代に大きな影響を与えた（シンガー 1999: 349−352）。

ヴァイツによれば，心理学自体は，自然科学一般とのアナロジーで理解される。自然研究は法則の把握を通じて自然科学になる。自然科学は様々な観測器具や実験器具という外的道具と数学的諸学（力学を含む）および論理学という内的道具とを用いて，自然界に実在する素材的物質と基本的力を適切に仮定する。そしてそれらの物質と力で自然現象を説明しようとする。生命現象に関わる区別，たとえば有機物と無機物が全く異質なものかどうかについてまだ決着がついていなくても，物理学・化学と生理学は区別されるだろ

う[21]。そして，物理学・化学の法則は生理学でも通用するが，それだけで充分かどうかについても，まだ検討の余地がある，つまり生物固有の法則があるかもしれない，とヴァイツは考える（GP: 12−13）。ミュラーが生命力を想定していたことは知られている（ホール 1992: 249−254）。ヴァイツの念頭にはそのミュラーの見解があったのかもしれない。

一方，心理学も，経験素材から（自然科学での素材に対応する）要素や法則が見出せるかもしれないが，情況ははるかに良くない。それは実験ができないからだ。倫理的な理由もあるし，原理的な（という言葉をヴァイツは使わないが）理由もある。原理的な理由とは，たとえば他者の心的状態を覗き見ることはできないし，完全な自己観察も不可能だから，というもの。他者に対してはせいぜい外的表出を自己とのアナロジーで推測するだけだし，それであっても自らが体験したことがない状態については把握困難であろう。ヴァイツが挙げる例は，色覚多様者の感覚世界や，音楽を好きでない人の音楽感覚（ヴァイツは大の音楽好き），四体液説に基づく気質の相違に基づく個体差など。また，自己観察も困難を伴う。観察する自己と観察される自己への分裂は観察されるべき心的状態の強度を損なうし，その際に〈観察される心的状態〉とは〈観察されるべき心的状態を観察している自己を含む心的状態〉なので純粋な〈観察されるべき心的状態〉そのものとは言えないから。それでも多大な努力と訓練によって必要な情報は得られるだろう（GP: 13−15）。心理学は実験不可能だとするのは，もはやヘルバルト派の伝統かもしれない（本間 2019: 10−11；本間 2021: 55）。

ヴァイツは，哲学は心理学という土台の上に建てられるべきと考える。そ

21）1828年に有機物である尿素を人工合成したのがフリードリヒ・ヴェーラー（Friedrich Wöhler, 1800−1882）。ここでいう有機物とは〈生命をもつもの〉というニュアンスを含むので，単なる個々の物質のことではない。ちなみに，ヴェーラーが1820年に最初に入学したのはマールブルク大学医学部だった（すぐにハイデルベルク大学に転校）。尿素合成はストックホルムのカロリンスカ研究所時代に行われ，1836年以降はゲティンゲン大学の化学教授だった。https://www.deutsche-biographie.de/sfz86001.html。

の場合の心理学は，単なる事実の説明としての自然科学的心理学ではなく，自然科学的心理学の根源を問うような形而上学的心理学である（GP: 15–16）。心理学の土台は生理学にある，とすでにヴァイツは述べていた（GP: IV）。つまり，ヴァイツにとって形而上学的心理学とは脳神経の研究だったと考えてよい（形而上学的＝基礎論的と考える）。

だからといって唯物論のように〈脳とその活動が心自体である〉と考えるわけではない。ヴァイツはここで「最近の生理学者たちの中で最も重要な人びと」の意見を聞く。言及される人物と著作は以下。

△解剖学・病理学者ヤーコプ・ヘンレ（Jakob Henle）[22]の『一般解剖学』（*Allgemeine Anatomie*. Leipzig: Leopold Voß, 1841）

△解剖生理学者フランスワ・ロンジェ（François Longet）[23]の『ヒトと脊椎動物の神経系の解剖学と生理学』（*Anatomie et physiologie du système nerveux de l'homme et des animaux vertébrés*. Paris: Fortin, Masson et Cie., 1842）

△精神科医カール・ノイマン（Carl Neumann）[24]の『ヒトの脳の病気について』（*Von den Krankheiten des Gehirns des Menschen*. Coblenz: Rudolph Friedrich Hergt, 1833）

22）Friedrich Gustav Jakob Henle, 1809–1885。ドイツの病理学者，解剖学者。ミュラーの助手から，1840 年にチューリヒ大学，1844–1850 年にハイデルベルク大学で教授。人体の部分に名前を残す。

23）François Achille Longet, 1811–1871。後述マジャンディの弟子のフランス人解剖学者・生理学者。

24）Carl（Karl）Georg Neumann, 1774–1850。ライプツィヒ大学などで医学を学びヴィテンベルク大学で医学博士号を得る。以後医療実践に携わりながら多くの研究書を著す。1840 年代はリタイアして，ドイツ南西部のトリーア（Trier）で著述に励んでいた。

△フランスの解剖生理学者フランソワ・マジャンディ（François Magendie）[25]

△医師グスタフ・シピース（Gustav Spieß）[26]の『神経系の生理学』（*Physiologie des Nervensystems*. Braunschweig: Friedrich Vieweg und Sohn, 1844）[27]

△生理学者アルフレト・フォルクマン（Alfred Wilhelm Volkmann, 1801−1877）[28]が書いた『生理学ハンドブック第1巻』（Rudolph Wagner (herausgegeben), *Handwörterbuch der Physiologie*. Braunschweig: Friedr. Vieweg und Sohn, 1842）での「脳」の項目（同書，563−597）

△ヨハンネス・ミュラーの『講義のためのヒトの生理学ハンドブック第2巻』（Handbuch der Physiologie des Menschen für Vorlesungen. Coblenz : J. Hölscher, 1840）

当時は著名だったと思われる人びとの著作である[29]。彼らの研究では，脳

25）François Magendie, 1783−1855。コレージュ・ド・フランスの医学教授を1830−1855年に勤めた。マジャンディの著作についてはヴァイツは後の人が編集したものを利用している。
26）Gustav Adolf Spieß, 1802−1875。フランクフルト・アム・マインの医師。当地で学術研究者として名を成していた。
27）ヴァイツは「Nervenphysiologie」と書いているが，おそらくこの著作のことと思われる。
28）Alfred Wilhelm Volkmann, 1801−1877。ライプツィヒ生まれの著名なドイツの解剖学者・生理学者。1828−1842年はライプツィヒ大学で教え，短期間今日のエストニアの大学の教授になったがすぐに辞めて，1843年以降はハレ大学で教授。ヘルバルト派心理学者ヴィルヘルム・フォルクマン（Wilhelm Fridolin Volkman, 1821−1877）とは全くの別人（だが，死んだ年は同じ）。心理学者の方は後に騎士の称号を得たのでVolkman von Volkmarと呼ばれる（最後が r になる）。
29）現代でも少なくともWikipediaに項目が立つ程度には著名。

の一部に心があるという局在論的な見解は否定され，様々な機能が脳全体に存在するといういわゆる全体論を支持するようである（GP: 16−26）。どこかに司令塔となる場所があるわけでなく，心の内的統一性が示すように，少なくとも中枢神経系が全体としてシステムを成している，とヴァイツは言いたいようだ（GP: 28−36）。ヴァイツの文章はたいへん分かりにくいのだが，その言いたいことは，唯物論的な還元主義ではなく，デカルト的二元論でもなく，心身並行論に近い印象を与える（正確な読解であるかは自信がない）。この後，心の働きとしての表象作用の導入から，知覚，感覚についての心理学が展開される。その中で，〈感情〉という言葉は出てくるが，使用されている意味は〈感覚〉に等しい。

ともあれ，ヴァイツによれば，生理学を土台にする心理学は，今度は哲学の土台になる（GP: 111−126）。ここでもヘルバルトの伝統を受け継いでいる。また，同時代に通用していた心理学的装置（「心理学をダメにさせる仮説」（GP: 138））であったアプリオリ形式としての空間と時間（カントに由来する）は経験から獲得されたものであり，心的能力はそのような実体を持つものではなく，まとめたものにつけられたラベルであり，精神的素質（Anlagen）や気質は神経の状態の有機的関係に由来するにすぎない（GP: 126−138）。心的能力の否定もヘルバルト派の伝統である。その一方で，カントのアプリオリ形式の否定はヴァイツに独自と言えるだろう。カントに傾倒したベーネケやドロービシにはできなかったことだろう。

『心理学の基礎』の後半は動物の心的生活についての考察である（GP: 139−212）[30]。初期の科学的動物心理学と言えよう。ヴァイツは（後にダーウィンが試みるような）進化論的な見方をしているわけではないが，動物と人間を比較可能なものと見ている点ですでに自然神学とは立場を異にしている。有機体である動物に心があることは当然視していたとしても，それ

30）ヴァイツが動物心理学に取り組んで心理学書に組み込んだ理由は不明である。しばしばヴァイツは自らの行為の動機を語らないので，読者は推測するしかない。

でもまだ，人間と動物とは決定的に異なると考えている。なので，動物心理学の探究によって，かえって人間の心の特性が明らかになる（人間心理学から動物心理学を引けば人間固有の心理学になる），と考えているようだ。ヴァイツのやり方は，ここでも多くの他の研究者の研究を参照し，それをデータとして自らの見解をまとめ上げる，という手法である。おそらく，後の人類学の著作と同じやり方なのではなかろうか。

動物の感覚，本能，表象について論じて，最後の12ページほどの節が「動物の心情状態について」である（GP: 201−212）。様々な動物についての報告から感情や情動の例を挙げるが，最も重視するのは家畜（というよりはペット），特にイヌである。ヴァイツは，イヌを例にして，飼い主の表象に愉快感情が付着することを連合心理学的なやり方で説明する[31]。そして，イヌのなかに原始的な道義的感情があることを認めるが，美的感情はない，とする。

古典学を学んできたヴァイツがはじめて記した心理学著作である『心理学の基礎』[32]。ヘルバルトの影響を受けているが，生理学に基礎を置くというあたりにヘルバルトとの違いが見える。この著作でヴァイツが示す方法論は，ヘルバルトとは異なっている。では，いったい誰に由来するのだろうか。通常考えるとライプツィヒ大学での師であったドロービシが考えられる。ところが，ヴァイツは後にルートヴィヒの名前をあえて記して感謝の意を示しているのである。この人物について次の項で見ていこう。

第2節第2項　ルートヴィヒの科学的方法

ヴァイツが自伝で唯一名前を挙げて感謝している人物であるルートヴィヒとはどのような科学観に基づいて研究をしていたのか（より正確には，しよ

31）イヌはダーウィンが進化論を考える時に重要なヒントになった生き物でもある。以下を参照：エマ・タウンゼンド（渡辺政隆 訳）『ダーウィンが愛した犬たち 進化論を支えた陰の主役』東京：勁草書房　2020。
32）この著作には「献辞」に類するものがない。

うとしていたのか)。1852 年に刊行された『ヒトの生理学教本』(*Lehrbuch der Physiologie des Menschen*)第 1 巻の最初にこうある:「……動物身体に由来する全ての現象は,その要素的実在物たちにおいてそれらの〔要素的実在物〕が会合する場合に観察される単純な牽引と反発の結果だ,と結論づけられる」(Ludwig 1852: 2)。つまり,生命も物理法則(ニュートン力学と一部電気・磁気作用)で説明できるという機械論的な自然科学である(シンガー 1999: 352–353)。

カール・ルートヴィヒ(Carl Friedrich Wilhelm Ludwig)は,1816 年 12 月 29 日にゲッティンゲンの南にある小さな町ヴィツェンハウゼン(Witzenhausen)で生まれた[33]。父は軍人を引退して当地の公務員であった。ハーナウのギムナジウムを経て,1834 年にマールブルク大学で医学を学びはじめたが,政治的理由から一時追放された。それでも 1839 年にマールブルク大学に再び戻って 1840 年に医学博士号を得た。一時リービヒ(Justus Freiherr von Liebig, 1803–1873)の下にいたのちに,1841 年にマールブルク大学の解剖学研究所に勤めた。1842 年に同大学に教授資格論文を提出して,講師としてのキャリアを開始した。ヴァイツとの重なりは 1844 年からになる。ルートヴィヒは 1846 年に比較解剖学員外教授になった。しかし,ルートヴィヒにとってこのマールブルク時代は良い思い出の少ない時代だったようだ(先輩との関係が悪かったりした)。1849 年にチューリヒ大学に移籍し,その年末に結婚。1855 年にはウィーンの軍医外科学校ヨーセフィヌム(Josephinum)にさらに移籍,そして 1865 年にライプツィヒ大学に至ってここで生涯を終えることになる。ライプツィヒ大学では 1869 年に生理学研究所を創設し,多くの研究者を育成した[34]。1895 年 4 月 23 日に 79

33) ルートヴィヒの伝記については以下:Schröer 1967;Zimmer 1996。
34) シレアの著作にはルートヴィヒの弟子の一覧が 7 ページにわたって掲載され,その中には唯一の日本からの留学生として緒方正規(おがた・まさのり,1853–1919)の名前が見える(Schröer 1967: 291,ここでは「Ogata, Masonovi」と誤記されている)。

歳で気管支炎のため亡くなった。生涯現役であった[35]。そのため教育者としてのルートヴィヒに注目する論文もあるが（Neil 1961；Fye 1986），そのなかには生理学者ではないヴァイツについての言及は含まれない。

経歴からわかるように，ルートヴィヒはヨハネス・ミュラーに学んだ弟子ではない[36]。もちろん同時代人としてミュラーの影響は少なくないし，ルートヴィヒの盟友ヘルムホルツ（Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821−1894），ブリュケ（Ernst Wilhelm Brücke, 1819−1892），そしてデュ・ボワ＝レーモン（Emil du Bois-Reymond, 1818−1896）は皆ミュラー門下だった。それでも，或る意味，生命力を肯定する師を裏切った上述3人の門下生たちとルートヴィヒには通じるところがあった。それが非生命力，どちらかといえば機械論的な生理学であった。前述『ヒトの生理学教本』（Ludwig 1852）はこの3人に献じられている。特にデュ・ボワ＝レーモンとは生涯の友人で多数の書簡を交わしていた。これらの書簡が，自らについて語る文章の少ないルートヴィヒ個人について教えてくれる貴重な資料になっている[37]。また，研究者として，教育指導者としてエルンスト・ハインリヒ・ヴェーバー（Ernst Heinrich Weber, 1795−1878）の影響も大きかった。このヴェーバーのライプツィヒ大学での後任になるのがルートヴィヒである。

ヴァイツとの関連で重要なのがマールブルク時代のルートヴィヒの科学研究である。ヴァイツが心理学書を書いていた頃，ルートヴィヒは腎臓と排尿の研究をした直後であった。ヴァイツがそれらの論文を読んだかどうかは不明だが，直接ルートヴィヒから話を聞いたかもしれないし，少なくとも生理学の文献資料の在処やその選定について学んだことは間違いない。そして

35）なので，研究者から早々に啓蒙家になった友人のデュ・ボワ＝レーモンと対比されることになる：Franefield 1988。
36）だから，ルートヴィヒがヴァイツにミュラーの著作を推奨したとしても，師弟関係があったからではなく，ミュラーが当代随一の生理学者だ，という理由からだろう。ミュラーとルートヴィヒの対比については：Rothschuh 1953。
37）シレアの著作にいくつかの書簡が採録されている：Schröer 1967。

ルートヴィヒ自身から生理学の研究方針を学んだだろう。この時代のルートヴィヒの科学的方法を示す文献としては，上述の教授資格論文（Ludwig 1842；Ludwig 1843）と，それを元にしたヴァグナー（Rudolf Friedrich Johann Heinrich Wagner, 1805−1864）の『生理学辞典』（*Handwörterbuch der Physiologie mit Rücksicht auf physiologische Pathologie*）第2巻における「腎臓と尿準備」の項目（Ludwig 1844）がある。

ヴァイツの方法論と関わりがあると思われるのは1842年の教授資格論文「尿分泌を補助する物理的諸力について」（*De viribus physicis secretionem urinae adjuvantibus*）である。この論文は当時の習慣でラテン語で書かれている（ヴァイツは，少なくともラテン語は問題なく読めただろう）が，翌1843年にドイツ語版『尿分泌のメカニズムについての学説への寄与』（*Beiträge zur Lehre vom Mechanismus der Harnsecretion*）も出版された[38]。両方とも骨子は変わらない。ただ，ラテン語版の最後に〈この続きは次の論文で！〉という主旨のことが書いてあり，その〈次の論文〉がドイツ語版であるので，後者の方を参考にする。実際，ドイツ語版はラテン語版の増補版になっている。また，ラテン語版の論文は「解剖学部分」と「生理学部分」という章題を付けて分けられているが，ドイツ語版では構造はそのままに章題がなくなった。それでも，あった方が便利なので本論文では「解剖学部分」（Ludwig 1843: 1−12），「生理学部分」（Ludwig 1843: 13−42）と区別する。

ルートヴィヒの目的はタイトルにあるように腎臓における尿の生成を機械論的，すなわち力学的のみに従って説明することにある。まず，〈尿の成分は血液に由来する〉ことが当時の多くの研究者と共通に認められる。そして血液から尿にそれらの成分が移行する場所が腎臓の糸球体であることも認め

38）以下にラテン語版とドイツ語版の再録とそれぞれの英語訳がある：Ludwig 1994。このルートヴィヒの仕事に対する評価については：Davis, Thurau, & Häberle 1996。また，腎臓の今日の科学知識に関しては：坂井建雄，『腎臓のはなし』東京：中央公論新社　2013。

られている。これらを前提として，まず最初に否定されるべき仮説がある。それは〈血管と糸球体の管が吻合し直接物質のやりとりがある〉という仮説である。最初の「解剖学部分」で，ルートヴィヒは腎臓の解剖と関連する同時代の知識に充分精通していることを充分アピールしたのち，血管と糸球体の管の吻合はない，ということを解剖学的事実として提示し，上述の仮説を葬り去る（Ludwig 1843: 1−12）。ここでのルートヴィヒの議論には，実際の腎臓解剖の経験に基づく記述の詳細さと実際の実験手順の具体性という特徴がある。

さらに「生理学部分」の冒頭でも血液および尿の成分の詳細で定量的な分析が行われていて，経験的データに論証が基づくことを印象づけている（Ludwig 1843: 13−19）[39]。成分の分析は解剖学ではないので「生理学部分」に入るのだろうが，経験的データの提示としてはここまでがひとまとまりになる。実際，次のメカニズムについての議論のまえに区分けを示す記号が入っている（Ludwig 1843: 19）。

前の部分での議論を受けて，物質の移行は血管と糸球体の管とを隔てる膜を透過して行われる，ということになる。当時，この透過の原因として生命力，化学力，機械力（物理力）の3つが候補となっていた。生命力は定義も曖昧であるし有無もわからないので当面無視（あとでまた戻ることになる）。第2の候補である化学力は内浸透（Endosmosis）と言われ[40]，化学的親和力の一種である。つまり特定の物質を誘引する引力である。引力であるからには相互的で，つまり腎臓の側に誘引されるのと同じ物質が必要だが，尿中にある不溶性尿酸は通常血液中にはないので，この化学力は成り立たない。また，成分比の違いも説明できないので，化学力の可能性はない。同じ事は第1候補の生命力にも当てはまる。さらにその生命力を有する腎臓実質が尿と

39）ただし，成分分析の数値はルートヴィヒ自身の測定に由来するものではなく，先行研究に依る。

40）ラテン語版では「exosmosis」（外浸透）となっていた。血管から引き出すことを考えるか，糸球体の管へと引き入れることを考えるかの違いだろう。

なる成分を引き寄せることができるとしても，尿として腎臓実質から尿管へと排出する反発力も同時に持たなければならない，ということになる。このような誘引と反発を矛盾なく説明できないので，生命力という原因もありえないことになる（Ludwig 1843: 19–22）。親和力の否定はデータに基づき，生命力の否定はそれに加えて論理にも基づく。

消去法で第3候補である物理的力，すなわち圧力だけが残る。この血流の圧力と腎臓の膜にある細孔を通過する毛細管現象を組み合わせて血液から尿成分を濾過する仕組みが考えられる。ルートヴィヒは単に空想するだけでなく，実際にチューブを組み合わせた実験装置を作って物理的に仕組みを再現する（Ludwig 1843: 22–29）。ここでも，実験装置の記述と計測数値が詳細に記述され，それによってルートヴィヒの仮説にとって有利な議論が展開されることになる。

さらに，必要とあれば内浸透も再導入する。ただし，親和力に基づくのではなく，物理化学的な濃度差に応じた物質の移動という形式で（Ludwig 1843: 31–37）。ここでは動物の血清を使った実験が行われ具体的なデータが提示されている。

以上で全てではないが，ルートヴィヒのやり方を知るにはここまでで充分だろう。ルートヴィヒは，或る現象について説明するために，既存の複数の仮説と，自らの機械論的仮説を用意した。それらの仮説は，受け容れられた前提や解剖学的事実と矛盾する場合は淘汰された。自らの機械論的仮説が成り立つ条件を探るために（その仮説が可能であることを示す）実験を行った。そして，必要とあれば既存の概念装置を再解釈して使用した[41]。なにより，全編に渡って（他者のデータに由来するものもあるとはいえ）定量的実験データとそれに基づく論証が印象的である。

ヴァイツは自伝で「彼〔＝ヴァイツ〕が自分の心理学的研究を生理学とい

41）17世紀機械論的生理学でその先例が多く見られる。たとえば：本間栄男，「Jacob de Back（1594–1658）の生理学」，『哲学・科学史論叢』，2005，**7**: 1–38。

う進行中の学問との可能な限り厳密な結びつきを設え，その結果徐々に心理学研究に強く経験的な基礎を与えようと努力したことについて，彼〔＝ヴァイツ〕の友人のルートヴィヒの提案に感謝しなければならない」（自伝: 154）と述べた。前項でのヴァイツの自然科学観はまさにこのルートヴィヒの論文に，特にその実験データという経験的な基礎に基づく論証という姿勢に見出せるのである。

第2節第3項　『心理学教本』における自然科学的心理学

前著から3年後に書かれた『自然科学としての心理学教本』（LP）は，前著のようなマニフェスト的な著作ではなく，教本としての体裁で心理学全体を扱っている。

その冒頭でヴァイツは，心理学における唯物論的な立場と観念論的な立場の対立をヘルバルト心理学によって超克することがこの著作の課題だ，と宣言する（LP: V-VI）[42]。そのヘルバルト心理学の本質にあるのが自然科学の方法である。「私〔＝ヴァイツ〕は，まず或る仮説を真であり受け容れられるものとして推論しようとし，その仮説を確かなものとして，〈その仮説の結果，心的現象の全体が関連していて理解可能なものとして現れる〉ことによって証明しようとした」（LP: VIII）。ここでいう仮説は経験の制約に基づいて作られる。つまり，特定の形而上学的前提からの演繹で人間心理を説明する唯物論・観念論のやり方ではなく，ニュートン（この名前は出てこないが）の『プリンキピア』第3部における哲学規則での仮説形成を意識したものである[43]。この時代すでにハーシェル（John Frederick William Herschel, 1792−1871）の仮説演繹法に関する著作は公表されているが[44]，ヴァイツは

42）後に行うことになる同時代の心理学書の書評もこの線である（SP）。
43）「哲学することの諸規則」，（河辺六男 訳）『世界の名著26　ニュートン　自然哲学の数学的諸原理』（東京：中央公論社　1971），415−417。
44）John Frederick William Herschel, *A preliminary discourse on the study of natural philosophy*. London: Longman, Rees, Orme, Brown & Green, 1831。だが，ヴァイツがこの著作に目を通したかどうかは不明。

前著で述べているように心理学実験を用いないので，厳密な意味で仮説演繹法にはならないだろう。なので，仮説の良し悪しは内的整合性と判明性を基準に判断されることになる（LP: VIII-IX）。

序において，ヴァイツは，観念論哲学を否定した後に，心理学を哲学の基礎に据えようとする[45]。その際に，心理学の前提となるのは経験的自然科学であり，それに基づいて心的現象の法則性を心理学は見出そうとする（LP: 12）。経験的自然科学とは具体的には生理学である。だからといって心理学を生理学に還元するというのではなく，感覚の働きや中枢神経系の存在といった程度のこと以上を生理学には望めない（LP: 14−15，さらに本論文第 2 節第 1 項）。それを補う経験的情報の源としては自己観察による内的経験しかない。ところが，前著でヴァイツ自身が論じたように（本論文第 2 節第 1 項）自己観察には問題がある。純粋な自己観察は無理であるし，記憶に頼ろうとしても再現できないものがある。情動や情念がそれである（LP: 15−17）。これを補うために，心的状態の外的徴に注目し，他者の観察から推論するやり方があるが，これも，万人で同じ外的徴が同じ心的状態に対応するかどうかはわからない（LP: 17−18）。結局，自己観察が限定付きで最も確実な情報源になるだろうが，内的心情が正確に言語化できるかどうか，という問題も生じる（LP: 18−19）。

このように経験科学として心理学がふさわしくない理由を挙げると，カントの心理学否定論が再び思い出される（LP: 19−20）[46]。しかし，自己観察可能なものの中で上記の批判に耐えうるものとして，感覚を通じた知覚（感官知覚）がある。感官知覚は心的機能の中で最も単純であるがゆえに，最も普遍的に当てはまる心的現象理解の基礎となる（LP: 20−22）。しかし，化学のように，全ての心的現象を要素にまで分析できるわけではない。ここでもま

45）以下の部分は城戸が要領よくかつ簡潔にまとめている（城戸 1968: 446−448）。
46）カントの心理学否定論については以下：犬竹正幸 訳「自然科学の形而上学的原理」，『カント全集　第 12 巻』（東京：岩波書店　2000），10 ページ。

た，カントの批判が有効である（LP: 22−25）。心理的最純物である感官知覚から実際に心的現象がどう組み上げられるかを明らかにするのは不可能だというのならば，組み上げられる可能性を示すことで満足しなければならない（LP: 25−26）。これは分析に対する総合に対応する。心的現象の説明のためにそのように組み上げられた（総合された）概念は，当然現実と合致しなければならない。さらには，複数の単純物の活動がどのように協同で作用して生じるのか，そこにどのような法則があるのかを示さねばならない。これらの要件を満たして仮説が形成される（LP: 27−28）。これは自然科学における仮説と同じであり，哲学における仮説が整合性と経済性（いわゆるオッカムの剃刀）にのみ基づくのとは異なる（LP: 28−29）。つまり「この〔ようにして作られることになる〕仮説自体は単純活動の協同作用の類をより詳しく定めそれと共に，その協同作用が則る法則の原理を含む。この仮説から，心的現象と状態の推移を形式的配慮で[47]定める全てが導出されることになる」（LP: 31）[48]。

もちろんこの仮説は心理学としては出発点なので証明できない。ただ，既存の生理学の知識や自己観察による事実と調和している必要がある。さらに，この仮説からの演繹によって心的現象が説明されるべきで，もし不都合があれば，仮説を修正しなければならない。仮説修正が必要となる場合のチェック項目は以下の５つ：

1）元々の仮説が定まった生理学的あるいは心理学的事実と矛盾しているかどうか。
2）その仮説から説明できない心的現象が存在するかどうか。
3）その仮説から，我々が自己意識の中で出会わない心的現象が導かれるかどうか。

47）「in formular Rücksicht」，直前の「法則（Gesetz）」に則ってという意味。
48）〔〕内部は本間による補足。

4）その仮説から至るところで正しく〔我々が自己意識中で出会う心的現象が〕導出されるかどうか。
5）我々の内部で生じた出来事についての〔その仮説から〕引き出された総合的推論が，我々がそれを為したかのように明らかにされる〔＝その推論がそのまま我々の内部で生じたことの記述になっている〕か。（LP: 32−33）

以下，ヴァイツは仮説の提示を行い，心理学の主題として，感官，心情（感情と欲求と意志を含む），知性という順番で論じていくことになる。この分類は伝統的なドイツ心理学の３分割（知・情・意）とはかなり異質である。だが，心についてのヘルバルトの分割（表象する精神＝知性，心情）の前に表象の入力としての感官を加えたものだ，と考えれば連続性は容易に見て取れる（本間 2019）。

第２節第４項　『心理学教本』における心の本質

ヴァイツは世界を理解する２つのやり方を提示する。１つ目は，自然に一貫した秩序と規則性を認めて全ての自然現象を必然性によってその因果関係を洞察するやり方。もう１つは非物質的な唯一の原理，すなわち精神を頂点とする位階で世界全体を秩序づけるやり方。前者は実在論，後者は観念論である。ヴァイツは同時代の観念論を退け，経験から出発する実在論を心理学の方針として据える（LP: 34−41）。だからといって，粗雑な唯物論（神経繊維の運動に心を還元する）も採用しない。（神経繊維などの）空間的運動が心的現象の説明としてまだ全く不充分だからである（LP: 41−46）。

我々の経験の内実は全て内的状態であり，その一部は感情，意志など狭い意味での内的状態そのものであり，他は外部の事物と表象力を介して繋がる内的状態である。より厳密には，その内的状態の変化を我々は経験する（意識する，というニュアンス）。この変化は質的な変化であって，つまり空間的なものではない。この変化の基体は内的経験であり，常に質的な変化であ

るために非空間的である。「非空間的心的存在を，心的現象がそれと共にそれの中で生じる実体として想定することは，自然科学の厳密経験にも我々の内的経験にも矛盾していない」（LP: 50）ので，これがヴァイツの言う心の本質についての仮説である（LP: 47−50）。心が空間的でない，ということは，心は物質的存在ではない，ということを意味する。前著でも心が脳の一部ではないと論じていた。では心とは何なのか，については心理学の問う（問える）ところではない，という。これはヘルバルトと共通した見解である（本間 2019: 17）。ただ言えることは，「心は普遍的に自然の中で支配する因果関係の外側にいるのではなく，心の行いと感受（Leiden）は心が心のなかで起こる変化への影響力を備える他の自然存在と共にあることによって制約される」（LP: 55−56）。つまり，自然的な因果法則に従うという点で，心は科学的に探求することができるし，心が何であろうと自然科学的に探求可能であることがわかっていれば充分だ，というのがヴァイツの考えなのである。

ヴァイツは心理学において多くをヘルバルトに負っている。けれども，ヘルバルト心理学の基本的な部分についていくらか異論はあるものの，そしてヘルバルトの数学的心理学をそのまま鵜呑みにはできないとするものの，数学が心理学に応用できること自体は問題視しない。ヴァイツは，心理学の数学化のためにはまだデータが足りない，法則も不充分だ，という点を指摘しているにすぎない（LP 136−142）。

第 3 節　ヴァイツの感情論

第 3 節第 1 項　心情

ヴァイツ感情論で感情を含む包括的な用語としてあげられるのが「心情（Gemüth）」である[49]。心的生活を外的事物に由来する部分と内的なものに

49）以前の論文では「気持」などの日本語を充ててきた。用語の選択を度々変更して申し訳ない。

由来する部分に分けると，後者に心情という用語が当てられる。外的なもの＝客観的実在物は人間に依存しないので，どの人間にも普遍的に当てはまる心的活動を引き起こすのに対して，心情は個人ごとに異なると予想される。だが，心的活動に規則性を見出すためには，繰り返し生じることで何らかの形式を見て取れるものでなければならない（LP: 272−274）。

外界の把握に関連するものは感官と知性であり，残りが心情の領域となる。ここには，感情と関心あるいは努力が入り，それらが個人の様々な資質に応じて多様性を見せる。これらは，感じること（これは感官を通じて外的な事物を感じるのではなく，内的な心的事象を「感じる」という意味）と欲求という２つの基本現象と結びついて，一方で純粋主観的感情と感性的・道義的感情に属し，他方で欲求と意欲に属する。この後者に情動と情念が含まれる（LP: 274−275）。

好き嫌いのある欲求と結びつくために感情は愉快・不愉快を持つ。欲求と感情（欲することと感じること）は非常に密接に相互関連しているので，分離して理解すべきではないほどである（LP: 275−276）。

では，心情は（それとは異なるものとされた）感官的なものと知的なものとはどのような関係にあるのか。それには心情状態の変化を考える必要がある。感情はわずかな刺激からでも，妨げられない限りは，人間全体を巻き込むまでの力を持つ。感情の活動エネルギーは，或る時はゆっくり，或る時は急速に上昇するが，最高点に達するとわずかに静止した後に，やはり或る時はゆっくりと，或る時は急速に下降する。思考の場合，最高度＝最高の明晰性と明証性に達するとそれは瞬間的にしか保たれず，すぐにゆっくりとあるいは急速に暗闇に沈む。心的活動のエネルギーの上昇と下降のパターンは感情と思考で似通っている。ただ意図的にコントロールできるかどうかで異なる。思考は努力すれば明晰性を高められるが，感情は意志の影響で活動の幅を間接的に制御することができるのみである（LP: 278−279）。

知性と感情の関係は，教育に実例を見ることができる。知的教育を受ける

と，思考の範囲（思考圏）が広がり，それが感情にも変化を及ぼす：「思考圏の変化と共に人間の感情世界も一定の変化を経験する：いくつかの感情は思考の前進する変化によって徐々に鈍く弱くなり，他方で全く新たなものが現れてくる」(LP: 281)。思考圏の変化だけでなく，社会における立場の変化も（知性のみならず）心情状態にも作用する。つまり，心情生活は知的活動に多く依存している（LP: 279−282)。

また，心情生活は感官性に決定的に影響を受けている。内的で個人に永続的なものとしては気質，外的で一時的な偶然の刺激による神経状態(Nervenstimmung）がある。ただし，気質は生涯で徐々に変化しうる。情動と情念については，身体状態を伴い，それらの持続を助ける。病気か健康か，空腹か満腹か，酔っているか素面かも（LP: 284−286)。

第3節第2項　感情とその性質　(1)形式的感情

美的感情と道義的感情を除いて，大部分の感情は，表象されたものの質的内容ではなく，表象力の形式のみ（つまり，どのように表象されるか）を原因として成立する[50]。ヴァイツ自身の経験が教えることは，活気ある感情が成立する場合，複数の表象間の圧迫（Drängen）と相互反発（Widereinanderarbeiten）がある。そのため1つ1つの表象はわずかの間しか留まらず，不安定であり，表象の上昇と妨害が起こり，これが感情の源泉と言える（LP: 291−292)。表象間の圧迫の力学的作用自体が感情であるので，表象の内容は感情と関係ない，ということになる。上述のように内容と関連する感情もあるので，単に表象間の圧迫のみで生じる感情を緊張の感情あるいは通常感情(Gemeingefühl）と呼ぶ（LP: 292−293)。これらの考察によって，感情は表象内容に関わらない，表象の流れ（表象進行）の形式にのみ依存する感情と，表象内容に関わる感情に2分される（表1)。

表象の流れの形式にのみ依存する感情をヴァイツは第1種としてまとめ

50）この項はローマンの論文と重複する箇所を扱っている。

SEELE 心	Sinnlichkeit 感覚			
	Gemüth 心情	Gefühl 感情	表象の形式にのみ関する	期待（Erwartung），満足（Befriedigung），裏切られた感（Täuschung）
				疑念（Zweifel），不安（Unruhe），成功する行為の感情（Gefühle der gelingenden Thätigkeit）
				退屈（Langweile），うんざり（Überdruß），倦怠（Ermüdung），気晴らし（Unterhaltung）
				対比（Contraste）
			表象の内容に関する	知的感情
				美的感情
				道徳的感情
		情動 情念		
		欲求他		
	Intelligenz 知性			

表１　ヴァイツの感情分類

る。その最初の亜種には，期待（Erwartung）がある。きっかけとなる或る表象が現れたとき，記憶からそれに続く表象列が上昇する。これが期待である。続いて感官知覚から入力される表象列と合致すれば満足（Befriedigung），しなければ裏切られた感（Täuschung）となる（LP: 301–310）。

次の亜種は疑念（Zweifel）。裏切られた感を経験した人は，今後もまた裏切られる可能性を知る。これが疑念となる。疑念が長く続くと不安（Unruhe），不安を解消しようと性急に動こうとすることが焦燥（Ungeduld）や不機嫌（Mißmuth）といった情動になる。逆に疑念が晴れると成功する行為の感情（Gefühle der gelingenden Thätigkeit）が生じる（LP: 310–315）。

次は手持ち無沙汰あるいは退屈（Langweile）。期待する人が心奪われ緊

張しているのに対し，退屈した人は注意散漫でうんざりしている。求めるものの表象による圧迫が期待で，現にここにあるもの，できれば捨て去りたいものの表象による圧迫が退屈である（だとしたら表象の内容に関係するのでは，と思うのだが，ヴァイツはそう考えていないようだ）。ここにはうんざり（Überdruß）と倦怠（Ermüdung，ドイツ語では身体的疲労感の意味もあるため，ここではそれを除いた精神的なもののみ）という感情が属する。うんざりはリズムの遅さやくどい繰り返しによって，倦怠は感覚の減少によって生じる。逆に，表象変化が予期できないが，興奮も緊張ももたらさないならば，それは気晴らし（Unterhaltung）となる（LP: 315–330）。

最後の亜種は対比（Contraste）の感情である。ヴァイツの例は言葉足らずなので私が補うと，砂糖と思って塩をなめるときに感じる感情，というものが基本のようだ。塩と思って塩をなめるときと感官知覚は同一だが，思い違いをしていた場合には〈砂糖vs塩〉の対比が生じるのでより激しく感じられる，ということを言いたいのだろう。だが，さらにヴァイツが挙げる例はもっと奇妙だ。ヴァイツは言葉遊び（言葉の多義性を利用した上手い言い回し）や矛盾（互いに排除し合う2つの表象が1つの思考活動として統合されていること）もここに含めている（LP: 330–333）。以上が形式的感情であった。

この部分はヘルバルトが『心理学教本』第1部で論じている感情品目と重なるところが多い（本間　2019: 21–23）。表象一元論のヘルバルトによれば，感情は表象自体ではなく，表象の状態である。つまり表象の形式だ。ヘルバルトの『心理学教本』第1部ではそれに基づいた感情論が展開されていたのだから，ヴァイツの形式的感情と似た品目になることは当然である。

第3節第3項　感情とその性質　(2)表象内容と関連する感情

第2種の感情には，表象内容と関わる感情が含まれる。具体的には知的感情，美的感情，道徳的感情，の3つである。それぞれが，真理，美，道義性と関連する。全ての感情には愉快・不愉快があるが，第2種の感情では真・

美・善が愉快，非真・非美・非善が不愉快となる（LP: 334−335）。

これらの感情があるからといって，真・美・善を判断する思考が感情に基づいている，というのではない。思考（認識）が完全な判断を下せないときに，補助的に役立つのみである（LP: 335−338）。ということは，真理感情とは，何が真理か判明でないときに感じる〈これが真だ！〉という直観に似ていると言える（ヴァイツはそう言わないが）。だから，完全な真理を目の前にして我々は真理感情を抱かない（LP: 338−340）。

次は美的感情だが，これはローマンの論文に詳しいのでここでは省略（Romand 2015）。ヴァイツは視覚芸術と音楽芸術での美を扱うが，音楽の扱いが圧倒的に大きい。これはヴァイツ自身の趣味と関連するのだろう。

最後に道義的感情。道義的感情は人間関係のなかにいてはじめて表に現れる。外界から来る影響は我々の身体的状態に対して妨害的か促進的か中立的である。これが表象と連合して，表象された外的対象に投影されることになる。今度はその外的対象が，それが引き起こす感情の担い手とみなされ，客観的な性質とみなされることになる。つまり，対象が愉快か不愉快になる。もちろん，情況によって同一対象が愉快になったり不愉快になったりすることもある。子供時代からのこれらの経験の総計が或る対象への愛着（Neigung）あるいは嫌悪（Abneigung）となる。子供は生きていないものよりも生きているもの，特に人間に注意を引き寄せられる。人間同士がコミュニケイションすると，お互いの同質性（お互いが人間であること）を知る。つまり，自己と他者に人格を見出す。この他者に愛着や嫌悪の（あるいはヴァイツは述べないが，中立の）感情を見出し，それを他者という対象の像のなかに埋め込む。これが人間関係に基づく道義的感情の由来である（LP: 388−394）。

人格を持つ他者が意志を持って我々に対峙するときに，我々の行動は影響される。その他者が我々のふさわしくない行動に何らかの罰を与えるなら，その他者に対して我々はふさわしい振舞いに関する権威の感情（Gefühl der

Autorität）を持ち，それが他者の表象と結びついて我々の中で道義的な振舞いを強いることになる。これに逆らうと後悔（Reue）の感情を抱くことになる。ヴァイツによれば道義的後悔を持ちうるのは宗教に信頼を寄せいている人間の場合のみである（LP: 394−396）。

倫理の基礎を法律に見出そうとする立場に対して，共感（Mitgefühl）あるいは同情（Sympathie）を実践的な基礎とみなす立場もある。だが，共感は純粋な道義的感情ではない。ヴァイツは自然人の例を挙げる。自然人は自制，すなわち感情表出の抑制を知らない（それは文明によって学ぶものだから）。そのため，感情（この場合，情動を指していると思われる，本論文第3項第4節）は表情や身体姿勢，身振り手振りで表出される。これらの外的表出は，自然人の場合は本能的に模倣される。すると，模倣された表出が今度は対応する心的状態の表象を引き起こす。つまり，模倣した人のなかに，模倣された人のなかにあった表象が再現されることになる。我々（文明人＝ヨーロッパ人）にも同じことが起こる，とヴァイツは続ける。だが，我々は模倣をしなくても，（おそらく推論によって）自身の固有の経験との類比で他者の心的状態を理解できる。つまり，見るだけで影響を受ける。ときには身体的刺激も再現してしまう。手術の立会人が失神するのがその例だ[51]。まとめると，共感は反射的なメカニズムのようなものであって，道義的感情とは言えない（LP: 396−399）。ヴァイツの共感論は今日の心理学・脳科学的にも通じる。特に，身体表出から心的状態が引き起こされるという見解は，情動のジェイムズ＝ランゲ説を予見している。

次に良心（Gewissen）と嘘（Lüge）。罰への恐怖や悪意などで意図的に他者を騙そうとすることが嘘である。ただ，嘘は感情ではないので，正確には

51）アメリカでホレス・ウェルズ（Horace Wells, 1815−1848）が笑気ガスによる全身麻酔に成功するのが1844年，ウィリアム・モートン（William Thomas Green Morton, 1819−1868）がエーテルで成功するのが1846年，イギリスでジェイムズ・シンプソン（James Young Simpson, 1811−1870）がクロロホルムで成功するのが1847年のこと。麻酔を用いた手術が広まる少し前の話である。

「嘘の非道義性についての感情（Gefühl der Unsittlichkeit der Lüge）」ということになる。ヴァイツの議論はわかりにくいが，嘘を嘘として認識している自己に良心がある（あるいはその自己が良心である）と言っているようである（LP: 400−402）。

道義性は道義（Sitte），すなわち個人を超えた（おそらく社会にある）力に従うことである。道義に従うことで個人は名誉感情（Ehrgefühl）を得る。さらに正義感（Rechtsgefühl），分別（Billigkeit），感謝（Dankbarkeit）などが，ここに属する（LP: 402−404）。これらは或る行動をした人物全体に向けられる感情である。正義感は，何らかの法や権利（ドイツ語では同じRecht）を犯した人物に向けられる。感謝は自己に対して好意的な意志で行動する他者に向けられる。「分別」と訳した感情については正義感と似ているが微妙に違う，そして正義感と感謝の間にある，とされるものの私にはよく解らなかった（LP: 404−410）。これらの感情は自然に習得されるもの（単なる教化による）ではなく，教育が必要だ，とヴァイツは考えているようである（LP: 410−411）。

最後が好意（Wohlwollen）。好意は美的なものや感官的関心（すなわち外見の良さ）とは無関係に生じる。恩義があるとか道義的に尊敬できるという理由からでもない。ともかく自由で独立に生じるのだという。好意を持つ人との相互交流がお互いの中の好意の像を反響させ増大させる。特定の他者だけでなく一般的な好意もある（LP: 411−415）。

以上が心情論における感情の部分。この後に欲求と意志の話が続く。その後に情動と情念が来る。

第3節第4項　情動と情念

心情論における最後の2つの節がそれぞれ情動と情念に当てられる。後回しにした理由をヴァイツは，情動と情念の大部分が心理学と同じほど生理学にも属するから，としている（LP: 473）。これは理由としては甚だ弱い。こ

の『教本』の最後は知性論だが，それは心理学にとって異質だから最後にしたわけではないだろう。

ともかく，ヴァイツは言い争いでカッとなる場合の心理状態を記述する。言い争いは様々な不愉快感情（名誉や正当性を傷つけられることなど）を積もらせていき，それが争う相手の表象と結びついていく。ただ，実際にどの段階で情動が生じるのかを明確に指定できない。何らかの情動の性格は表象の流れが（言い争いが生み出した）激しい不愉快感情によって邪魔されることで表れる。直後にその話が出てくるので，ここでいう情動は怒り（Zorn）のことだろう（LP: 474−476）。ヴァイツは，単なる心的状態から外的に表出されるきっかけを作ることになったものを（その表出までを含めて）情動と呼んでいる，と思われる。

驚き（Schreken）は最も強く身体反応を引き起こす情動である（LP: 476−477）。情動である恥（Schaam）と感情である恥辱（Beschämung）の差異は，或る場合では度合いの差異に過ぎない。その度合いの差異とは，身体表出の有無である（LP: 477−478）。

情動の一般的性質は，心情の均衡状態の重大な攪乱である。情動の成立はそれに対応する感情がすでにあることが前提だが，逆に感情があったからといってそれだけで情動に移行することはない。何らかの外的刺激がきっかけとなる場合が多い（LP: 478−479）。

情動を理解すると，それを避ける方法がわかる。といっても，ストア派のアパシーのように情動を無くすことは不可能だ。それは情動が我々の身体と結びついているからである。情動に伴い起こる身体状態は意図的な（意志に基づく）ものではなく，身体の構造自体に依存している。その身体状態に対して意図的に抵抗すれば，若干は情動をコントロールできる。だが，四肢の震えや赤面のように止めることができないものもある。このように情動は身体状態と切り離せないので，純粋に心理学的な分類はできないし[52]，少なく

52）なので，ヴァイツはドロービシの情動分類を受け付けない（LP: 481−482）。

とも外的な徴は生理学の説明を待たねばならない。自己観察は身体のことを理解できないので，情動の研究には向かない。そして，突発的行動は持続しないので情動は持続しない（なので，自己観察が難しい）。さらに，身体活動を伴うので情動は消耗的である。また，子供は情動に屈しやすいが，大人は思考力（これが子供には不足している）で情動を押さえ込める（LP: 479–481）。

情動の説明は，睡眠中の夢や熱病の妄想・錯乱にも当てはまる（LP: 482–486）。

次に情念。情動と情念の区別は，その時間的持続性にある。短時間のものが情動で，持続するのが情念である。この情念は，それ自体は情動ではないが，単なる心情を情動へと変える力を持つ。情動はイマココで起こるものでその時々の対象を持つが，情念は排他的に特定の目標を目指している。この強い思考（表象）の流れが他を押しやるために，情念を持っている状態では情動が生じやすくなる（LP: 486–487）。

情念は一定の対象への執着であり，欲望である。なので，それに対抗するには思慮深さを訓練するしかない。情念は，社会のなかで様々に絡み合って出現するので（美術品を集めるのは，所有欲であり，見せびらかしたい名誉欲でもある），分類することは事実上不可能である。ということで，ヴァイツは分類は提示せずに終わる（LP: 487–492）。

ヴァイツの情動・情念論はドロービシのような図式的な分類を拒絶している。代わりに心身相関的な説明が多く，生理学との関係を充分に意識しているものである。

第 4 節　まとめ

ヴァイツについてガーディナーは触れていない[53]。ヘルバルト派のヴァリ

53）Gardiner, H. M., Metcalf, Ruth Clark, & Beebe-Center, John G., *Feeling and emotion: A history of theories*. Salt Lake City: American Book Publishing 1937

アントということで省略されたのだろう。

ローマンはヴァイツを「「情動性（affectivity）のヘルバルト学派」の最も優れた代表の一人」という（Romand　2015: 385）。確かにヘルバルトの『心理学教本』での感情論が 7. 5% だった（本間 2019: 26）のに対し，ヴァイツは心情論がほぼ全体の 3 分の 1，そのなかで狭義の感情論と情動論をあわせて 22. 5% ほどになる（全体 685 ページ中のおよそ 155 ページ）。割合で 3 倍だ。これは急激な感情論の拡大と見える。ところが，この間にドロービシの『心理学教本』の 14%（全 335 ページ中の 47 ページ）を挟むと，むしろ徐々に拡大していった結果とも思える。ヴァイツ感情論で最も比率の大きい美的感情（35 ページ＝25% を占める）の大半が音楽に関するものであって，ヘルバルトもドロービシも音楽論に独立した著作を充てていることを考えれば，ヴァイツが突出している印象は弱まるだろう。ただ，このあとのフォルクマンのヘルバルト主義心理学教本[54]では 9% 弱（406 ページ中の 35 ページ）に減少するので，ヴァイツが前後よりは目立つことは間違いない。

ヴァイツの考える「自然科学的心理学」は経験を素材に法則を抽出しようとする，ベイコン的帰納主義であった。ルートヴィヒの科学的方法のように仮説を補強するために実験を使うことはなかったが，経験の重要性と生理学の知識を基盤にすることをヴァイツは学んだ。ヴァイツは大きく表象形式に関わる感情と表象内容に関わる感情とに分割した。おおまかにヘルバルトの『心理学教本』における「基本理論」編での感情と「経験心理学」での感情に対応していて，ドロービシには似ていない。さらに，詳細に情動を分類したドロービシに対して，ヴァイツは生理学的に未詳の部分が多いという理由で情動は感情に比して淡泊な扱いしか受けない。ヴァイツの議論には，ヘル

（矢田部達郎・秋重義治 訳『感情心理学史』東京：理想社　1964）。ドロービシの論文で「全く触れていない」のに参考文献に挙げていたが，よく考えればおかしなことだった。

54）Wilhelm Fridolin Volkmann, *Grundriss der Psychologie vom Standpunkte des philosophischen Realismus und nach genetischer Methode als Leitfaden für academische Vorlesungen und zum Selbststudium*. Halle: J. Fricke, 1856。

バルトやドロービシにあったような，視覚的明晰性が欠ける。理系や数学への素養の有無か，音楽に秀でていたことのトレードオフなのかもしれない。

ヴァイツの感情論はナーロフスキの『感情的生』（1862）へと繋がっていくことになる[55)]。

ヴァイツの著作

自伝

“Waitz (Theodor)”, in Gerland, Otto 1863, 153−155

GP

Grundlegung der Psychologie nebst einer Anwendung auf das Seelenleben der Thiere, besonders die Instincterscheinungen. Hamburg und Gotha: Friedrich und Andreas Derthes, 1846

LP

Lehrebuch der Psychologie als Naturwissenschaft. Braunshcweig: Verlag von Friedrich Vieweg und Sohn, 1849

SP

“Der Stand der Parteien auf dem Gebiete der Psychologie. Erster Artikel: Naturphilosophische und dualistische Psychologie”, *Allgemeine Monatsschrift für Wissenschaft und Literatur*, 1852, 872−888

“Der Stand der Parteien auf dem Gebiete der Psychologie. Zweiter Artikel: Idealistische und materialistische Psychologie”, *Allgemeine Monatsschrift für Wissenschaft und Literatur*, 1852, 1003−1026

55）ヴァイツに関しては，この論文では扱いえなかった様々な興味深い問題がある。誰かが教育学・人類学まで含んだ包括的なヴァイツ研究を行ってくれることを望む。そして，本論文での私の間違いを正してほしい。

AP4

Theodor Waitz' Allgemeine Pädagogik und kleinere pädagogische Schriften. Vierte durch Beigaben vermehrie Auflage herausgegeben von Dr. Otto Willmann. Braunschweig: Verlag von Friedrich Vieweg und Sohn, 1898

参考文献

Davis, John M., Thurau, Klaus & Häberle, Dieter 1996, "Carl Ludwig: the discoverer of glomerular filtration", *Nephrology Dialysis Transplantation*, **11**: 717−720

Franefield, Paul F. 1988, "Carl Ludwig and Emil du Bois-Reymond: A study in contrasts", *Gesnerus*, **45**: 271−282

Fye, W. Bruce 1986, "Carl Ludwig and the Leipzig physiological institute: 'a factory of new knowledge'", *Circulation*, **74**(**5**): 920−928

Gebhardt, Otto 1906, *Theodor Waitzs pädagogische Grundanschauungen in ihrem Verhältnis zu seiner Psychologie, Ethik, Anthropologie und Persönlichkeit*. Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakltät der Universität Leipzig. Langensalza: Hermann Beyer & Söhne (Beyer & Mann)

Gerland, Georg 1898, "Lebensbeschreibung von Waitz", in AP4, LXXII-LXXIX

Gerland, Otto (Herausgegeben) 1863, *Grundlage zu einer Hessischen Gelehrten=, Schriftsteller= und Künstler=Geschichte von 1831 bis auf die neuest Zeit*. Kassel: August Freyschmidt

Gundlach, Horst U. K. 2012, "Germany", in David B. Baker (ed.), *The Oxford handbook of the history of psychology: Global perspectives* (Oxford: Oxford University Press), 255−288

ホール，T.S. 1992,『生命と物質』下巻　東京：平凡社（T. S. Hall, *Ideas of life and matter: Studies in the history of general physiology, 600B.C.-A.D.1900*. Chicago: University of Chicago Press, 1969 の訳）

Henke, Ernst Ludwig Theodor 1864, *Worte am Grabe des Prof. Dr. Theodor Waitz am 23. Mai 1864*. [Marburg]

本間栄男 2017,「日独感情用語とその分類についての一試論」,『桃山学院大学社会学論集』**51(2)**: 41−69（この論文の誤記については，本間　2019，を参照）

本間栄男 2019,「ヘルバルトの感情論」,『桃山学院大学社会学論集』**53(2)**: 1−31

本間栄男 2020,「ベーネケの感情論」,『桃山学院大学社会学論集』**54(2)**: 31−60

本間栄男 2021,「ドロービシの感情論」,『桃山学院大学社会学論集』**55(2)**: 39−78

稲富榮次郎 1936,『大教育家文庫 19　ヘルバルト』東京：岩波書店

Jahoda, Gustav 2014, "Theodor Waitz on psychic unity", *Integrative Psychological and Behavioral Science*, **48**: 176−203

城戸幡太郎 1968,『心理学問題史』東京：岩波書店

Ludwig, Carl 1842, *De viribus physicis secretionem urinae adjuvantibus*. Marburgi Cattorum: Elwerti Academicis, in Ludwig 1994

Ludwig, Carl 1843, *Beiträge zur Lehre vom Mechanismus der Harnsecretion*. Marburg: N. G. Elwert, in Ludwig 1994

Ludwig, Carl 1844, "Rieren und Harnbereitung", in Rudolph Wagner (herausgegeben), *Handwörterbuch der Physiologie mit Rücksicht auf physiologische Pathologie*. Zweiter Band. (Braunschweig: Friedr. Vieweg und Sohn),　628−640

Ludwig, Carl 1852, *Lehrbuch der Physiologie des Menschen*. Erster Band. Heidelberg: C. F. Winter

Ludwig, Carl 1994, "1842 − A landmark in nephrology: Carl Ludwig's revolutionary concept of renal function", *Kidney International*, 1994, **46(Supplement 46)**: 1−23（ラテン語とその英語訳。この続きでページ番号のないドイツ語版とその英語訳が続く）

Muszynski, Frz. 1900, "Theodor Waitz als Philosoph und Pädagoge", *Pädagogische Monatshefte*, **6(2)**: 65−75

Neil, Eric 1961, "Carl Ludwig and his pupils", *Circulation Research*, **9(5)**: 971−978

野島忠太郎　1937,『心理学発達史』東京：大都書房

Romand, David 2015, "Theodor Waitz's Theory of Feelings and the Rise of Affective Sciences in the Mid-19th Century", *History of Psychology*, **18(4)**: 385−400

Rothschuh, K. E. 1953, "Johannes Müller und Carl Ludwig: Ihre Bedeutung für die Entwicklung der modernen Physiologie", *Deutsche medizinische Wochenschrift*, **78(2)**: 71−74

Schröer, Heinz 1967, *Carl Ludwig: Begründer der messenden Experimentalphysiologie*

1816–1895. Stuttgart: Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft M.B.H.

シンガー，チャールズ 1999,『生物学の歴史』東京：時空出版（Charles Singer, *A history of biology to about the 1900*. Third and revised edition. New York: Abelard-Schuman, 1959 の訳）

Smith, Woodruff D. 1991, *Politics and the sciences of culture in Germany, 1840–1920*. New York: Oxford University Press

Stout, G. F. 1889, "The psychological work of Herbart's disciples", *Mind*, **14**: 353–368

Willmann, Otto 1898, "Über Waitz' praktische Philosophie", in AP4, IX-LXXI

Zeller, Eduard 1877, "Drei deutsche Gelehrte, 2. Theodor Waitz", in Eduard Zeller, *Vorträge und Abhandlungen. Zweite Sammlung* (Leipzig: Fues's Verlag), 363–373.

Zimmer, Heinz-Gerd 1996, "Carl Ludwig: The man, his time, his influence", *Pflügers Archiv: European Journal of Physiology*, **432(3Suppl)**: R9–R22

The Natural Scientific Psychology of Theodor Waitz

HONMA Eio

In this paper, I aim to make it clear the “natural scientific psychology” of Theodor Waitz (1821–1864). His psychological method is Baconian induction, which sought to extract laws from experience. He did not use experimentation to support his hypotheses like the scientific method of his friend, Carl Ludwig (1816–1895). But Waitz learned from Ludwig the importance of experience and knowledge of physiology as a basis of psychology. Waitz divided emotions into those related to form of representations and those related to their content. That division roughly corresponds to the emotions in “Rational Psychology” part of Herbart’s *A Textbook in Psychology* (Lehrbuch der Psychologie) and the emotions in its “Empirical Psychology” part, and does not resemble Drobisch’s. Furthermore, in contrast to Drobisch, who categorized emotions in detail, Waitz treats emotions less than feelings because there are many physiological unknowns in mechanism of emotion arising. Waitz’s argument lacks the visual clarity that Herbart and Drobisch had.

Keywords: Theodor Waitz (1821–1864), Carl Ludwig (1816–1895),
history of psychology, feeling (Gefühl)